

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所: 川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話: 044-988-0004 (柿生中学校)
<http://www.kakio-kyodo.com>
 第65号

麻生区高石在住 日本の地名研究の第一人者

谷川健一氏の逝去に思う

◆今、なぜ地名が重要なのか◆ 安易な地名変更は文化の喪失に

故、谷川健一氏は、民俗学者・地名研究者・歌人・雑誌『太陽』の編集者・歌会始の召人(めしうど)・文化功労者、など多くの顔をお持ちでした。その中でも「地名」に対する思いは強く、特に地名の改変には強い危機感を感じていらっしやいました。

昭和56年(1981)には神奈川県と川崎市の支援のもと川崎市に日本地名研究所を設立され、毎年「全国地名研究者大会」を開催し、地名研究の普及に努めてこられました。氏は、常々「地名は日本人のアイデンティティーに不可欠な存在である」との持論をお持ちで、精力的な研究活動を続けていらっしやいました。

日本の歴史の中で、日本文化に大きな打撃を与えたものに「応仁の乱」、「廃仏毀釈」などがありました。もう一つは「地名の喪失と改変」であると思えてなりません。始末が悪いことに、地名はその被害が具体的に目に見えず、生活にそれほど大きな障害があるというわけではなく、地元の方々もそれほど危機感を持っているわけではありません。

しかし、「地名」は大切な郷土文化です。「地名」は祖先が、それぞれ意味を持ってつけたものです。人々が関わった歴史的事件・地形・自然環境・風俗習慣・政治・産業等々、心に残った強い印象がその意味となったのです。

私たちが故郷の歴史を知りたいと思う時、郷土史に関する本などを紐解いてみるのがよくありますが、祖先の思いに直接触れることはなかなか難しいことだと思います。しかし、地名には祖先の具体的な心の在り方や感じ方が如実に現わされていることが多いのです。例えば、麻生区の場合、「片平」は村の中央を流れる川(片平川)を挟んで一方は比較的平坦で、もう一方は高い丘陵地帯となっている地形に思いを感じてつけられた地名と考えられます。また、「麻生」の地名は、室町時代に「麻生郷」として登場しますが、「麻の生(お)うる地」との強い思いがあり、人々の生活と麻との強いつながりの様子が伝わってきます。今でも麻生一帯では、紫蘇によく似た葉を持つ「苧麻(ちよま=からむし)」が多く自生しています。「王禅寺村」の「般若面(はんにゃめん)」は、他地域でもよく見られますが、年貢が寺院の維持費にあてられる土地の意味を持っています。きっと王禅寺との深いつながりがあったのでしょう。いずれをとっても過去の時代の郷土の自然や社会の姿を地名がしっかりと伝えてくれているのです。

昭和37年(1962)に施行された住居表示法によって、全国で多くの地名が改変されました。その法令は過去の地名の由来や意味を考えず、全く土地に関わりのない地名をたくさん作り出してしまったのです。時の政府は慌てて『由緒ある地名を尊重すべきこと』という趣旨の法改正をしましたが、何の効果もなかったとのこと。近年では

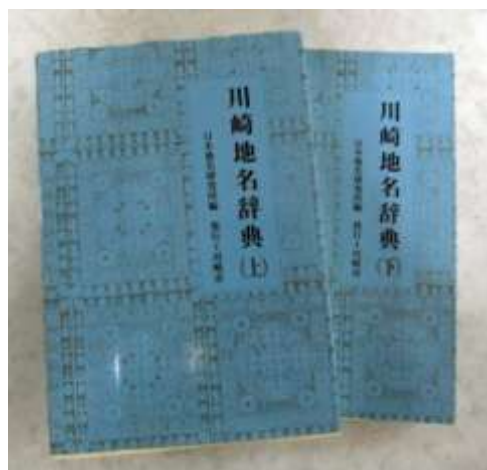
「平成の大合併」と称する市町村の合併が大々的に実施され、新しい地名が次々と誕生しています。果たして地名の意味をしっかりと理解したうえでの新地名の命名であったのでしょうか。私たち現代人は、過去の祖先の思いをしっかりと受け止めながら新しい文化を築いていかなければなりません。谷川氏は「地名を軽視し、安易に改変する事背景には地名についての無知が潜んでいる」と語られています。

幸いにも現在、川崎市には谷川氏が設立した「日本地名研究所」が全国の地名研究者を束ね、さらに川崎市内の地名を網羅した「川崎地名辞典上・下」(左写真)等を発行し、多くの研究者が活用しています。

一方、川崎市教育委員会の「地名資料室」は全国屈指の地名関連資料を持ち、書籍約2万5千点、地図約1万点が所蔵されており、各地から多くの研究者が訪れ利用しています。皆さんも是非一度来訪され、郷土の地名に触れ、祖先の思いを感じてみてはいかがでしょうか。(文:板倉)



全国地名研究者大会で講演する谷川氏



シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第35話

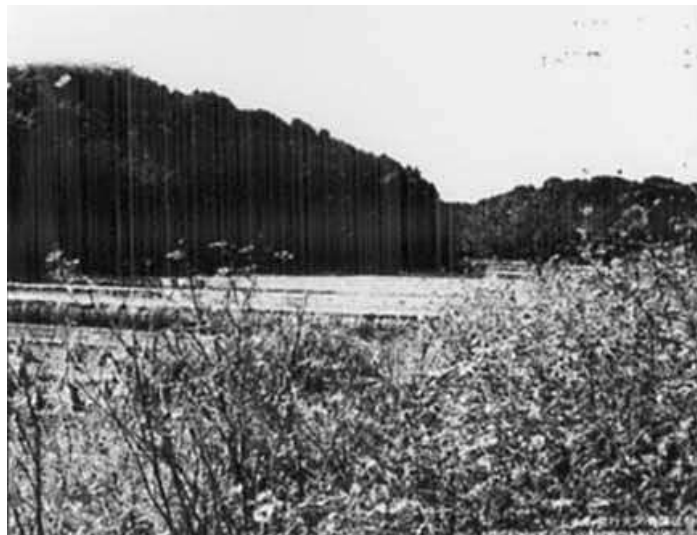
都筑の武士 ～都筑党～

小島 一也 (柿生郷土史料館相談役)

都筑というと今は横浜市都筑区(港北ニュータウンなど)があり、遠い感じがしますが、柿生村が昭和14年川崎市に合併するまでは、同じ都筑郡(11ヶ村)で、私は小学校の頃先輩に連れられ郡の青年団運動会に二俣川(旭区)まで行った覚えがあります。都筑の名の起こりは古くは万葉のころからとされ、鶴見川が作り出す野や山、谷戸等々が続き、都筑丘陵とも呼びますが、この地の持つ風土は北の多摩丘陵とは異なる武士たちを発生させています。

吾妻鏡は鎌倉幕府が編纂した日記風の歴史書ですが、この中に前橋の小山田氏や稲毛氏に並んでよく出る名が都筑氏で、都筑三郎、都筑平太等があり、都筑氏は頼朝の旗上げ(1180)当初平氏に属しましたが許されて源氏に帰属。平太経家は馬乗りの名手で、將軍頼朝の面前で癖馬を乗りこなして激賞されて厩舎の別当に任じられたとのこと(古今著聞集)。

この都筑氏の出身の母体は立野牧で、研究者によると現緑区の中山、十日市場、恩田川沿いの現旭区一帯がその本拠とされ、前述した小山田牧が小山田、稲毛の武士団を生んだと同様、都筑氏の祖は立野牧の荘司(管理者)とされています。



都筑の原風景

三郎の名が見えます。

これら武士の発生は農民によるもので、律令制度が崩れ、農民は都筑の特徴である谷戸を開拓して私有化、統領として土豪を生み戦力を備えたもので、鴨志田氏、奈良氏、中山氏など現在の地名を冠していて、これらの武士たちが何度か起きた鎌倉政変に滅亡を免れたのは地縁によるもので、都筑氏を統領に地域共同体の武士団を形成していたからではないでしょうか。

吾妻鏡に見る都筑の武士の中に、土地の名を冠する麻生〇〇、片平〇〇等の名はありません。それは前述した亀井六郎(亀井の館)の存在を裏付けることにもなりますが、黒川・岡上は小山田氏の勢力下で、古来、麻生の地は国(朝廷)の直轄地だったとの説もあり、この事は後に述べたいと思います。

ちなみに吾妻鏡は亀井六郎について、元暦2年(1185)5月7日の項に「源延尉(義経)の使者(亀井六郎)京都より参著す…」と腰越状使者であったことを記しています。以降その名はなく、都筑の武士とは無縁であったようです。

参考資料:「全譯吾妻鏡」「横浜市史」「青葉のあゆみ」



都筑郡の図(安政3年)

この都筑氏の一族は儂く消えた稲毛氏とは異なり、長い間この地に勢力を持ちました。吾妻鏡に見る都筑氏の記事を追ってみると、都筑平太の活躍は文治元年(1185)で、頼朝が死に鎌倉幕府の政変は北条氏の支配となりますが、嘉禎3年(1237)都筑経景なる者は四代將軍頼朝と御所の和歌の会に招かれた記録され、追って建長2年(1250)都筑右衛門の一族が内裏の造営に当たったとありますので、鎌倉幕府滅亡まで約100年間、都筑氏は幕府の中で相当の勢力を持っていたものと思われます。

都筑の武士団の特徴はこの都筑氏のほかに、鶴見川本支流を本拠に、それぞれ有力な武士がいたことで、前記吾妻鏡に出てくる源頼朝の上洛(1190)の随兵に、鴨志田十郎、江田小次郎、中山四朗、それに三輪寺



武士団(市民ミュージアム蔵)

シリーズ 黒船来航

開国秘話 (2)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆なぜ浦賀にオランダ語通詞(通訳)がいたのか◆

長崎を遠く離れた浦賀に、何故オランダ語の通詞(通訳)がいたのでしょうか。それは、幕府の上層部にとって、浦賀を含む三浦半島に、西洋の船がやってくるかもしれないということが、はっきりと意識され、その対処法が検討され、準備されていたからにほかなりません。

皆さんはまさかと思われるでしょうが、実を言うと徳川幕府は、米国艦隊の来航を予想し、消極的ながらそれを歓迎する雰囲気を持っていたのです。

いきさつを記しましょう。幕府は、砲艦外交で中国を屈服させたイギリスのやり方に反発し、強い反英意識を持つようになっていました。イギリスのやり口に大きな脅威を感じていたのです。

その反動から、同じように日本への接近を試みている、アメリカとロシアには、多少の親近感を抱いていました。ロシアは寛政年間の1792年に、ラスクマンの一行が漂流民の大黒屋光太夫らの送還と、通商の許可を求めて根室に来航したのを皮切りに、既に何度か開港を打診してきていました。光太夫の一行18名は1782年にアューシャン列島に漂着、エカチェリーナ2世の好意で10年後に日本帰還を許されたのです。

一方、アメリカは最後に日本にやってきた国です。1846年に、ビッドル提督指揮下の2艘の艦船が浦賀沖に現れ、通商を打診しています。このときは、結論を出す以前に、アメリカとメキシコとの戦争(米墨戦争1846~48年)が始まり、急遽帰国しました。

アメリカとの2度目の接触は、49年3月の長崎でした。アメリカ東インド艦隊のプレブル号が、自国の漂流民の救出に来たのです。実は前年48年に蝦夷地(北海道)に漂着した捕鯨船員が、長崎に送られたという情報が、オランダ経由で米国に伝えられたのです。

徳川幕府は外洋船を持ちません。ですから自ら漂流民を送還することが出来ず、苦心の末にオランダに漂流民のアメリカへの送還を依頼したのです。オランダはアメリカに事態を知らせ、漂流民引取り船の日本派遣をアドヴァイスしたのです。プレブル号のグリーン艦長は、捕虜が軟禁されていると考えて救出に来たのですが、事情は違っていました。漂流民の待遇は悪くなかったのです。ここでは、長くロシアで漂流民として暮らし、やがて送還された大黒屋光太夫らからの、事情聴取の成果が生かされていたのです。

グリーン艦長は感激しました。その結果、長崎奉行との話し合いは円滑に進み、この件は、武力の行使を伴うことなく、円満に解決したのです。この経験から、幕府はアメリカに好印象を持ったのです。

頻りに日本を訪れるようになった外国船の様子から、鎖国体制の維持が難しそうだと悟った幕府は、列強と交渉するならどこが良いか、友好国オランダの情報を参考に、一応の判断をもつに至りました。

その選択肢において、幕府はアメリカを第1位に推したのです。ペリーの名はありませんが、アメリカ艦隊の来航を予想する情報は、1852年に長崎にやってきたオランダ船によってもたらされました。名高い『オランダ風説書』です。そこには、来航の時期こそ明白ではなかったのですが、アメリカ東洋艦隊が、翌53年には、条約の締結を目指して日本にやってくるだろう、と記されていました。

ここに、反英意識とイギリス脅威論が強い幕府は、アメリカの来航を心待ちにし、来航地は長崎か浦賀のどちらかであろうと想定しました。ここで問題となったのが、長崎には常置しているオランダ語通詞が、浦賀にはいないことでした。

そこで、優秀なオランダ語通詞の堀達之助を浦賀に赴任させたのです。浦賀沖での堀の英語による第一声は、アメリカ船との交渉のために、堀が自らの考えで準備したものだったのです。

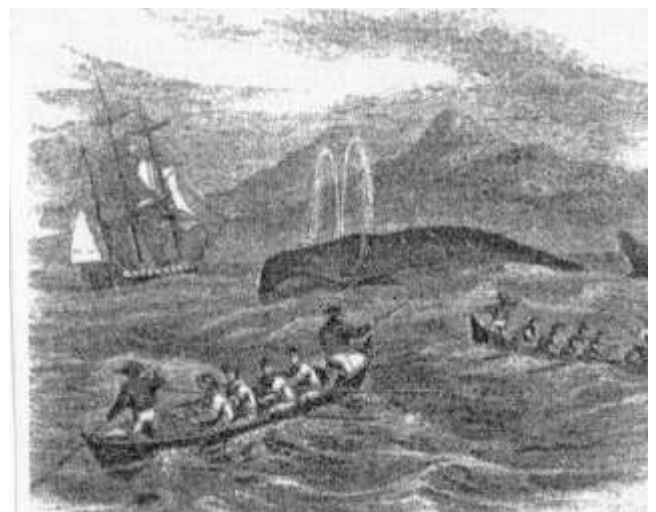
ペリー艦隊の浦賀来航は、徳川幕府にとって、想定外の事態ではなかったのです。



日本に帰国した光太夫と磯吉

(北槎聞略より)

18名の一行中、日本に帰国できたのは3名。うち小市は、上陸前に根室病没した



北太平洋での米国の捕鯨

鯨脂は照明用の油として珍重された

ジュニア・カルチャー・セミナー

たくさんの小中学生が集まる(8月5・8日)

◆地域の方々と郷土の竹細工実習◆

暑い日の続く中、8月5・8日に小学校とその保護者を対象とした竹細工実習が開催されました。柿生は昔から多くの竹や篠竹を産し、子供たちの格好の竹細工の材料となってきました。

当日は8月5日が37名、8日が34名の参加があり、指導者の支援委員のもと、子供も大人も大変熱心に竹細工の作り方を学んでいました。かなり難しい技術が必要な風車や、きれいな音の出る竹笛、肥後守(ひごのかみ=伝統的な小刀)を使用する竹トンボ、その他ストロー細工など、見事に完成した時の子供たちの喜びの顔が大変印象的でした。



柿生郷土史料館10~11月の開館日ご案内

◎開館日:偶数月は土曜日、奇数月は日曜日

10月 5・12・19・26日(毎土曜日)、27日(特別開館)

11月 3・10・17・24日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時~午後3時

柿生郷土史料館10~11月の催物ご案内 (すべて入場無料)

第4回 実物のミニ歴史資料展

「幕末海防への世論と発禁本」

主な展示資料 『戊戌夢物語(高野長英著)』『海外新話(嶺田楓江著)』『海国兵談(林子平著)』

内容 ・幕末、日本の庶民は中国で発生したアヘン戦争など海外事情を知っていたのか?
・これらの書物はなぜ発禁となったのか

公開日 **10月** 5・12・19・26日(毎土曜日)、27日 10月で終了です。

第44回 カルチャー・セミナー

シンポジウム 麻生の氏族を語る

第1弾 「麻生の鈴木氏」 ~他氏族とのつながりもわかってくる

コーディネーター 小島 一也氏 (柿生郷土史料館相談役)

パネラー 麻生区在住の「鈴木さん」にお願いしています

日時 平成25年 11月24日(日曜日)13時30分より

会場 柿生郷土史料館武道場(史料館手前)

内容 鈴木さんのルーツを知り、古代麻生の姿をイメージする

- ◇ 何故、麻生では鈴木姓が多いのか
- ◇ 鈴木さんは、いつどこから来たのか
- ◇ 源義経に仕えた亀井六郎との関係は

指定文化財現地特別公開

主催:川崎市教育委員会 協力:柿生郷土史料館支援委員会

小島家の「豊臣秀吉の御禁制(指定文化財)」リニューアル公開

◆◆中世の柿生を知る重要な資料◆◆

日時 10月26日(土)・27日(日) 10:00~15:00

会場 柿生郷土史料館

ご案内 所有者によるギャラリートーク

両日とも ①11:00 ②13:30

(当日先着30名様、10分前より整理券配布)

お知らせ

参考図書紹介

川崎市教育委員会編集

「川崎の文化財入門(上・下)」各500円

◆◆郷土史理解のための必携本◆◆

- 特色 *川崎市内の指定文化財を掲載
- *分野別編集で、わかりやすい解説が魅力
- *フルカラー写真多数掲載

先行販売決定! 10月26・27日柿生郷土史料館にて

